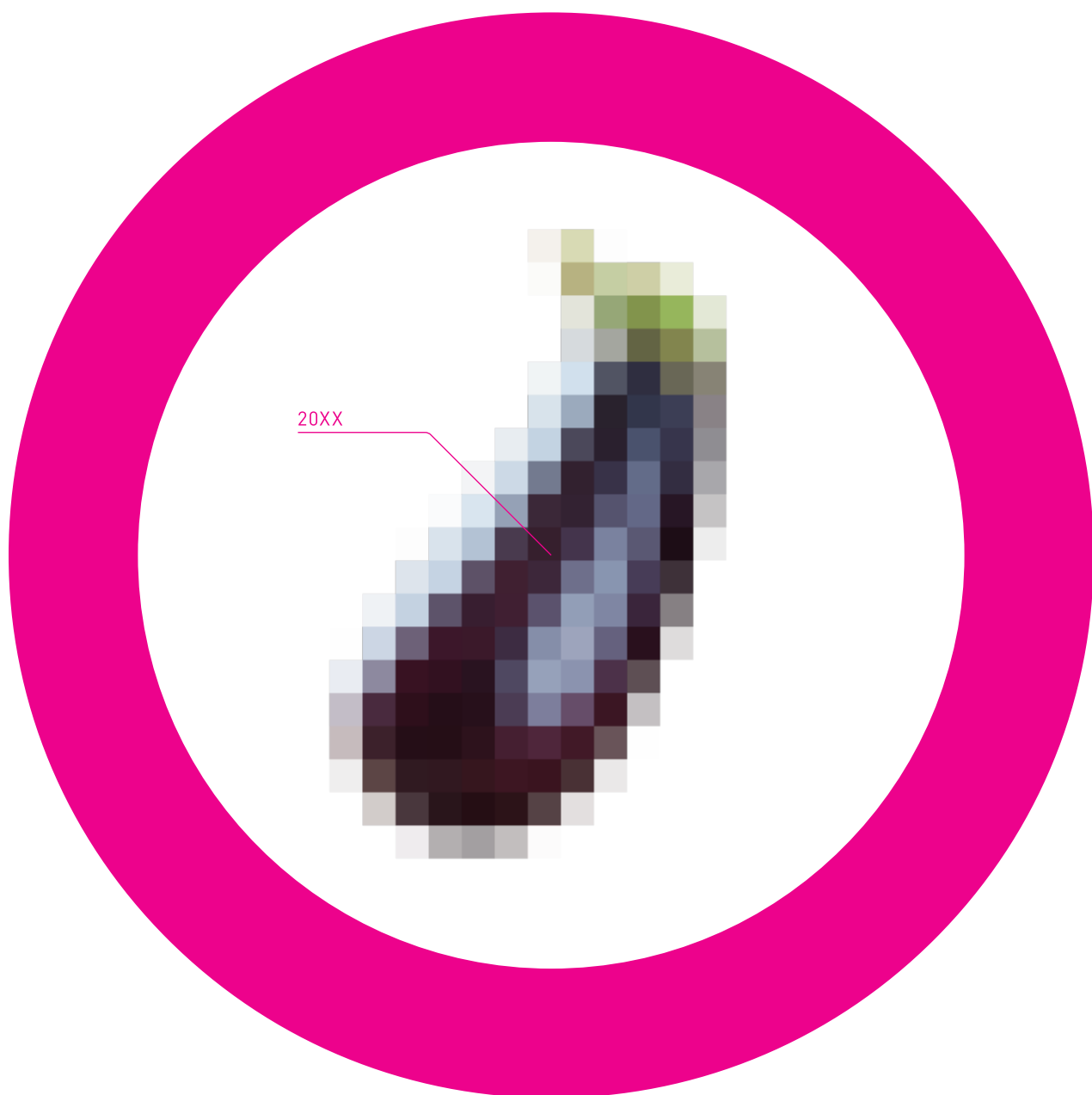


GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



20XX

No.54
2020 SPRING

今こそ学環の時代「スマートシティ」にみる連携の広がり

越塚 登 教授

2019年秋に新学環長・学府長へ就任された越塚先生にお話を伺いました。

スマートシティをめぐる研究活動について、また、今年度20周年を迎える学環学府について現在の思いを語って頂きました。



—はじめに、現在のご研究について教えてください。

大きく括れば、スマートシティ。スマートシティを構成する技術としてIoTやAI、ブロックチェーンも使う。だから技術の側から見ればIoTとかAIですが、応用の観点から見ればスマートシティかな。現在進めている研究には、主に農業に関するものと、電気メーターに関わるものがあります。

—農業に関するプロジェクトとは？

2018年から2019年にかけて、高知県農業技術センターとの共同研究を実施しました。その時はナスの収穫量をAIで予測する、ということをやりました。今年度は、農学部との共同研究でトマトを育てる予定です。東京の田無に農学部が畑を持っていて、そのビニールハウスをひとつ借りて「インテリジェントビニールハウス」をつくっています。トマトの栽培自体は農学部の人たちが実習としてやり、僕たちはその環境、温度とか湿度、日射量などのデータを測るための仕組みをつくっています。

—電気メーターに関わるプロジェクトとは？

家庭で使われている電気を測定しているメーターが、今どんどんスマートメーターになっています。そのデータがあると、実はいろんなことに役立つ。今取り組んでいる研究のひとつは、特に都心部で問題化している宅配便の不在配送に対するプロジェクト。佐川急便との共同研究です。今、20%くらいが再配達なんです。これがコストを非常に圧迫している。ならば、いないだったら届けない、いるときにだけ届けましょうっていう仕組みが電力メーターを使えば出来るだろうと思っています。

家に人がいる・いないをそのまま配達員に知らせてしまったらプライバシーの問題になります。そこでどうするかというと、配達ルートを自動的に作る仕組みをAIにつかって構築します。それを配達員の端末に表示する。上手くいけば、配達員の人たちは不在に出会うことがなくなります。新しい仕組みの場合にも、信用の問題は残りますが、配達ルートを自動生成する場合には、そのソフトウェアのことは信じてもらわなくては困るので。

—学環長としての越塚先生に伺います。今年度、学環学府は20周年を迎えますね。

そうですね。前向きなことを言うならば、今こそ学環の時代になったよね、というのが正直な思いです。20年前に、未来の情報社会はこうなるから、東京大学のなかで情報の研究をリードするために学環学府ができたけど、多分そのときに言っていた状態がまさに実社会になっている。だから昔よりもっと学環は世の中に貢献しなきゃいけないし、そう期待されているし、それを果たさなきゃいけないと思っています。

一方で、もう少し自己批判的に言えば、学環はまだ十分には社会に貢献できていないんじゃないかな。しなきゃいけないっていう言い方もできるけど、もっとできるはずだって思っています。例えば、僕の今の研究はスマートシティと言いましたが、スマートシティなんて本当に学環分野。スマートシティというと、すぐ欧州や米国がどうのっていう話が出る。日本なら地方都市をどうやって再生するかとか、東京の過密さをどうするかとかね。だけど、スマートシティをね、例えばアジアでやってみたらどうなるか。

この前話があったのは、ジャカルタ。ジャカルタはイスラム教だから、そこでスマートシティをやったら、何をどうやればいいっていうのが全然違うと思います。お祈りの場所が必要とか、断食で夜しか食べられなかったらレストランは遅くまで営業するのかとか、条件が違ってくる。スマートシティというのは、まちづくりだから、自ずと文化が関わってきます。文化研究なしにスマートシティはできません、でも、そういう知見は僕ら理系にはない。だから共同して取り組まなくちゃいけない。もちろんスマートシティだけではないけれど、学環の時代だからこそ、そういう連携を今後も広げたいと思いますね。

—学府の学生に期待していることは？

チャレンジする気持ちかな、ごく一般的だけど。僕の好きな言葉に「一勝九敗」というのがあってね。どんなに大成功している人でも「一勝九敗」らしいんだよね。ということは、沢山いろんなことにチャレンジしないと、成功もしないってことなんだよ。それが僕みたいに歳を重ねて、10勝90敗くらいになると、まあ今回は90敗目だなんて諦めもつく。だけど、特に学生の頃は1試合目とか2試合目でしょ。3連敗したら、結構めげちゃうよね。でもね、ふつう9連敗くらいしちゃうんだよ。だから、3連敗でめげないでねって言いたいね。あと負けると自分の基準を下げちゃう人がいる、勝てるように。でも基準を下げないで、負けることにあまり怖がらないで。どんなに成功しても、9回はみんな負けるから！そんなもんだからね。

ホームカミングデー

2019年10月19日、東京大学ホームカミングデーの企画として、情報学環では特別講演会「情報と空間」を福武ホール・ラーニングシアターで開催しました。越塚登学環長による挨拶の後、南後由和氏(明治大学)、豊田啓介氏(建築家)、そして情報学環より渡邊英徳が登壇しました。各講師の講演の後、暦本純一(情報学環)による司会のもと、トークセッションがおこなわれ、「デジタル・テクノロジーの発展は「ユートピア」をもたらすか否か等について、熱い議論が交わされました。3名それぞれの講師による様々な意見や展望が述べられましたが、共通の見解として、AI技術の進歩よりも、最終的には人類の適応力や価値観がデジタル・デザインの発展の方向性を決定していくという認識が見られました。講演会の参加者は100名を超え、盛会のうちに終わりました。

記事：岡 美穂子(准教授)



留学生旅行 「千葉・成田山新勝寺と房総のむら」

2019年11月9日朝9時、留学生22名と教職員3名は日帰り旅行に出発しました。今回の目的地は成田山新勝寺と千葉房総のむら。東大からバスで1時間半、まず成田山新勝寺に到着しました。境内を歩いている際、学生たちは釈迦堂や光明堂に関してガイドの方に質問を投げかけるなど、熱心に新勝寺の歴史を知ろうとしていました。総門の前で集合写真を撮り、昼食には魚介を中心とした美味しい和食を頂きました。その後、千葉房総へ移動し、武家屋敷で茶の湯体験をしました。招き猫の形をした落雁の写真を撮って楽しんだり、正座をしていて脚がしびれてしまったり、茶の湯の作法に自分なりにトライしてみたりするなど様々な反応がありました。普段交流の無い学生達が勉強を離れてネットワークを作ることができ、それぞれに楽しい思い出のできた充実の一日でした。

記事：菊地真由(学務チーム)



東京大学制作展 2019

東京大学制作展が本郷キャンパス工学部2号館にて、2019年11月14～18日に開催されました。本制作展は、学際情報学府の授業の一環として毎年7月と11月の2回開催されています。コンセプト設定・作品制作・運営を学生主体で行っており、今回の展覧会では、各種メディアを通して広く関心を集め、来場者数は延べ約1600名に達しました。展示のコンセプトは、「ああ言えば、こう言う。こう言えば、どう言う?」。前回の展覧会が「自己」の能動的な行動をイメージして「enact one's self」をテーマとしていたのに対して、今回は「他者」の存在を想定した「対話」をコンセプトに据えました。このコンセプトのもとに各作品や展示空間がデザインされ、実際の展示においても、制作者・来場者が感想や意見のやり取りを積極的に行なう場面が見られました。

記事：宗像佑弥(修士課程、制作展広報担当)



教育部研究生によるドキュメンタリーが 「地方の時代」映像祭優秀賞受賞

「メディアスタジオ実習Ⅰ/メディアジャーナリズム論実験実習Ⅶ」で作られた、「排除ベンチ～居心地の悪さをたどって～」という作品が、第39回「地方の時代」映像祭2019の「市民・学生・自治体部門」にて優秀賞を受賞しました。贈賞式は2019年11月16日、関西大学で行われました。受賞したのは、情報学環教育部研究生の田村進也さん、押野晃宏さん、小山このかさん、畑谷綾子さんの4名です。本作品では、公園などに設置された、真ん中に手すりのあるベンチを「排除ベンチ」と呼び、それがホームレスの排除を目的としているのではないかという仮定のもとに取材を行っています。田村進也さんからは「この作品を通して、私たちが普段見過ごしがちな「排除」というテーマについて少し立ち止まって考える機会になれば幸いです」とコメントが寄せられました。

記事：鈴木麻記(特任研究員)



日韓台シンポジウム 2019

「News, Information and Media in the Post-Truth Era」

ソウル大学・言論情報学科(韓国)、国立政治大学・伝播学院(台湾)、そして情報学環・学際情報学府が共催する共同シンポジウム「News, Information and Media in the Post-Truth Era」が、2019年11月22日～23日にソウル大学で開催されました。22日のシンポジウムでは、2つの教員セッションと4つの学生セッションが行われ、ジャーナリズム、ソーシャルメディア、災害情報学など、多様な研究テーマに関する報告があり、分野を超えて活発な議論が行われました。23日には、テレビ・ラジオ放送やデジタルコンテンツを扱うBitmaru Broadcasting Support Centerを訪問しました。そこでは実際のスタジオや専門機器を使って短いテレビニュース番組を作り上げるというミッションが与えられ、3大学の学生たちが共同作業を通して交流を深めました。

記事：田口純子(助教)



「すべてを保存する」無邪気な問いの力： 「APLLO」田村賢哉さんインタビュー

渡邊研究室所属でありダーウィンエデュケーション株式会社の代表でもある田村賢哉さんのプロジェクト「APLLO」は、データの関連性だけでなく、その意味や解釈を構造的に格納でき、情報の「文脈」まで捉えることを可能にする次世代オープンソース・データベースです。その開発には、空間情報のアーカイブと再表現に取り組んできた田村さんの研究成果が活かされています。今まで国連国際学校、米ウィルミントン大学、凸版印刷株式会社など、様々なプロジェクトで活用されてきました。また2019年4月、APLLOを応援するファンドが、日本国内クラウドファンディング史上最高額を達成して話題になりました。APLLOの根底にあるのは「すべての情報を保存する」という大きな目標。そうした「無邪気さ」を研究においても大事にしたいと話していました。

記事：安ウンピョル(博士課程・編集部)



「TBS×東大 テレビの学校」 プロジェクト

丹羽研究室は2019年より、TBSの企業内大学・TBSグループユニバーシティ(TGU)と共同で、「TBS×東大 テレビの学校」プロジェクトをスタートしました。今回のプロジェクトでは、TBSのアーカイブを活用してTGU向けのモデル授業・教材を開発します。まずはドキュメンタリー・アーカイブから着手し、次世代のジャーナリストやクリエイターを養成するための方法論を研究します。プロジェクトのスタート以来、TGUの概要やTBSアーカイブの現状について調査を進め、7月には「放送人の学びマップ」をテーマにワークショップも行いました。共同研究会のメンバーで「アーカイブを活用した学び」のプログラム案を出し合い、これらをマッピングすることで、プロジェクトの位置付けや方向性を確認することができました。

記事：丹羽美之(准教授)、鈴木麻記(特任研究員)



学生向けハッカソン 「あそびの未来ファクトリー2020」

2020年2月12日～3月4日の3週間、情報学環オープンスタジオにて、第2回目となる東大生を対象にしたハッカソン「あそびの未来ファクトリー2020」を開催しました。参加者たちはチームを組み、「あそび」とは何なのかについて考えを深め、「未来のあそび」を考え、そのプロトタイプを作ることに取り組みました。最終成果発表会では、各チームが制作したあそびのプロトタイプと、その紹介ビデオが発表されました。あそびについて考えること、楽しさを言語化すること、チームであそびを作ることなどの経験を通し、各参加者の中でそれぞれの学びがあったと思います。あそびの未来ファクトリーでの活動をきっかけに、知り合った仲間と協働して、あそびをさらに発展させたり、何か新しいことを始めたりと、今後も活躍していくことを期待します。

記事：阪口紗季(特任研究員)



令和元年度大学院学際情報学府 秋季 学位記授与式

2019年9月13日、秋めいた涼やかな気候の中、福武ホールラーニングシアターにおいて、学際情報学府の秋季学位記授与式が行われました。故郷から駆けつけたご家族、苦楽を共にした友人や教員に見守られながら、修士課程9名、博士課程3名の修了者に、越塚学府長より学位記が授与され、その後学府長と前田専攻長より祝辞が送られました。



令和元年度 秋季 入学式・ガイダンス

2019年9月18日、福武ホールラーニングシアターにて学際情報学府の入学式および入学ガイダンスが行われ、入学者のうち修士課程16名、博士課程3名が出席しました。当日は越塚学府長より、学際情報学府は2000年の設立以来、80の大学と100カ国から学生を受け入れていることが説明され、高度で学際的な環境への歓迎の祝辞がありました。

記事：志村絢子(学務チーム)

合格発表

2020年2月18日、令和2年度修士・博士課程冬季入試(2020年4月入学)の合格発表がありました。出願者数は修士課程109名、博士課程43名でした。最終合格発表者は、表の通りです。

冬季入試・修士課程合格者数	
文化・人間情報学コース	5名
総合分析情報学コース	11名
合計	16名

冬季入試・博士課程合格者数	
社会情報学コース	10名
文化・人間情報学コース	9名
総合分析情報学コース	6名
合計	25名

PEOPLE



着任教員自己紹介

藤本 徹 講師

ゲーム学習(Game-based learning)のデザイン方法や、シリアスゲーム・ゲーミフィケーションを取り入れた学習コンテンツ開発に取り組んでいます。大学総合教育研究センターのオンライン教育事業担当を兼務しており、オンライン教育における学習支援方法の研究も行っています。ゲームと学びの境界領域を深めて、研究領域として発展させることを目指して活動しています。

BOOKS



パブリック・ヒストリー入門

開かれた歴史学への挑戦

菅 豊・北條勝貴 編

発行年月:2019年10月 出版社:勉誠出版

いま、海外の歴史学では、パブリック・ヒストリーという新領域が、急速に拡大、成長しつつあります。それは、アカデミズムの「外」の社会へと飛び出して、歴史学の知見や技能、思想を活かす幅広い実践、そしてその研究を意味します。本書は、そのようなパブリック・ヒストリーの理論と実践を考える、日本初の概説書です。(教授:菅 豊)



逃避型ネット依存の社会心理

大野志郎 著

発行年月:2020年1月 出版社:勁草書房

計2万6千人への量的調査をもとに、ネットへの逃避が心理的ストレス要因とネット依存傾向を結びつけ、その結果として現実生活における実害が生じる構造を指摘、検証。逃避の抑制のためにストレスへの正しい対処手法を青少年に身につけさせることが、ネット依存問題への非常に有効な予防策となり得ることを示す。(助教:大野志郎)



足をどかしてくれませんか。

メディアは私たちの声を届けているか

林 香里 編

発行年月:2019年12月 出版社:垂紀書房

相変わらずどこに行っても日本人男性だけの東京大学の日常に、天を仰ぐ思いです。「安定」した制度や構造こそ、不平等を生む一大学、マスメディア、そして日本社会全体が、現状再生産のシステムに振りかかって、女性や性的マイノリティの現実にあまりに無頓着ではないか。そんな問題意識とともにつくられた本です。たくさんの人に手に取っていただきたいです。(教授:林 香里)



NNNドキュメント・クロニクル 1970-2019

丹羽美之 編

発行年月:2020年2月 出版社:東京大学出版会

1970年から日曜深夜に放送を重ねてきたNNNドキュメント(日本テレビ系列)は「真夜中のジャーナリズム」を開拓してきました。本書は、このNNNドキュメントの半世紀におよぶ歴史を集大成した待望のクロニクル(記録集)です。2465回の放送記録とテーマ別セレクションによって、類のない内容でNNNドキュメントの全貌を明らかにします。(准教授:丹羽美之)

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

【あとがき】

新年度を迎え、祝いのタイミングとなるはずが、大学そして世界の話は、新型コロナウイルス一色に染められています。疫病と社会の混乱はいつかに収束しておらず、この「あとがき」の執筆時点においても進行中です。ただし、ピンチはチャンスでもあります。例えば今年度、学際情報学府の「全学生」のためのSlackチームが初めて立ち上がり、研究室・コースの垣根を越えたつながりが生まれました。そして、Zoomなどを使ったオンライン授業も本格的に始まりました。さらに各研究室でも、現状の解決に寄与すべく、さまざまな取組が始まっています。この状況において、決して「コロナ以前」に戻ろうとするのではなく、学生・教員一体となり、新たな「大学」のかたちを模索していきたい。僕はそう考えています。(渡邊英徳)

GAKKAN 54 2020.4

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員: 安ウンビョル、鈴木麻記、鳥海希世子、丹羽美之、デイビッド・ビュースト、福嶋政期、渡邊英徳
デザイン: MARUYAMA DESIGN 丸山智也